

数 学

1 原典教科書と分冊の方針

(1) 原典教科書

発行者：数研出版株式会社

書名：「日々の学びに数学的な見方・考え方をはたらかせる これからの 数学 1～3」

「見方・考え方がはたらき、問題解決のチカラが高まる これからの 数学
1～3 探究ノート」

(2) 分冊と原典教科書との対応

学年	分冊	原典教科書の対応箇所等
第1学年	1-1	1章 正の数と負の数 1 正の数と負の数 2 加法と減法 3 乗法と除法 4 いろいろな計算
	1-2	2章 文字と式 1 文字と式 2 文字式の計算 3 文字式の利用
	1-3	3章 1次方程式 1 1次方程式 2 1次方程式の利用
	1-4	4章 比例と反比例 1 比例 2 反比例 3 比例と反比例の利用
	1-5	5章 平面図形 1 平面図形 2 作図 3 円
	1-6	6章 空間図形 1 空間図形
	1-7	6章 空間図形 2 立体の体積と表面積
	1-8	7章 データの活用 1 データの整理とその活用 2 確率 数学旅行
	別巻	別冊 探究ノート
第2学年	2-1	1章 式の計算

		1 式の計算 2 文字式の利用
	2 - 2	2章 連立方程式 1 連立方程式 2 連立方程式の利用
	2 - 3	3章 1次関数 1 1次関数 2 1次関数と方程式 3 1次関数の利用
	2 - 4	4章 図形の性質と合同 1 平行線と角 2 三角形の合同 3 証明
	2 - 5	5章 三角形と四角形 1 三角形 2 四角形
	2 - 6	6章 データの活用 1 データの散らばり 2 データの傾向と調査
	2 - 7	7章 確率 1 確率 数学旅行
	別巻	別冊 探究ノート
第3学年	3 - 1	1章 式の計算 1 多項式の計算 2 因数分解 3 式の計算の利用
	3 - 2	2章 平方根 1 平方根 2 根号をふくむ式の計算 平方根表（平方根表は原典教科書には掲載されていない）
	3 - 3	3章 2次方程式 1 2次方程式 2 2次方程式の利用
	3 - 4	4章 関数 $y = ax^2$ 1 関数 $y = ax^2$ 2 関数の利用
	3 - 5	5章 相似 1 相似な図形
	3 - 6	5章 相似

		2 平行線と線分の比 3 相似の利用
	3 - 7	6章 円 1 円
	3 - 8	7章 三平方の定理 1 三平方の定理 2 三平方の定理の利用
	3 - 9	8章 標本調査 1 母集団と標本 数学旅行 1年の復習・2年の復習
	別巻	別冊 探究ノート

(3)分冊の考え方

一度に複数巻の教科書を使用して学習することは、量的にも検索性においても負担が大きいため、できるだけ当該の巻のみで学習を進められるよう、各章を1巻にまとめるようにした。ただし、点字教科書のページ数が多くなりすぎる單元については、節がまたがらないように配慮しつつ分冊とした。

なお、以下の内容については、分冊にあわせ各巻に分けて配置した。「チャレンジ編」の問題や、ふりかえりや問題の解答は、該当の章の巻末に掲載した。「さくいん」は、それぞれの言葉が掲載されている巻末に配置した。

また、「この教科書について」、「学習の進め方」、「ノートの作り方」、「レポートを書こう」「学びの自己評価」は各学年の第1巻に掲載した。ノートやレポートは点字で書けるように変更し、図やイラストなどは削除した。

「数学旅行」と「…のまとめ」は各学年の最終巻に掲載した。各学年の「探究ノート」については、様々な章の内容と関連づけられていることから別巻とし、前期に配本することとした。

2 編集の具体的方針

編集にあたっては、基本的には原典教科書に大きな変更を加えることなく、点字を常用して学習する生徒（以下、「生徒」という。）の障害の特性に応じるため、視覚的な情報保障が不十分なため活動として成り立ちにくいものや理解しにくい等の題材及び教材（以下、「教材等」という。）についての適切な合理的配慮となるよう、次の(1)～(3)に記載する具体的な必要な配慮に基づいて「変更」「差し替え」「追加」「削除」しながら点字化を行う。

(1)認知の特性

視覚から映像による情報処理は、全体の情報を一度で把握することや一部分を詳しく把握すること、全体と部分を比較しながらとらえることが容易である（即時的把握）。一方、言葉（音声の聴取）による情報処理には、一つ一つの情報をつなぎ合わせて理解することから、距離や方向などは、初めから終わりまでの全ての情報を得てから記憶をたどりなが

ら全体像をとらえることとなる（継次的把握）。

このように認知の特性があることから、即時的把握により理解を深める教材等において、継次的把握に必要な情報を補足するとともに、触覚の弁別は視覚に比べ低いため、触知覚で認知しやすいよう本質的な内容を選び出し情報を省略したり、図や表等を文章化、数値化したり、必要に応じて補足の情報を加えたりする場合がある。あわせて、できるだけ比較しやすい位置関係の工夫を行うこと、題材の本質的な理解を促すために他の保有する感覚を総合的に活用するために工夫することなど配慮が必要な場合がある。

- ・視覚以外の保有する感覚に依存した学習に基づいた配慮
 - ・視覚的な情報に依存する認知処理に基いた理解を促す教材等にかかる困難さが生じる場合の配慮
- など

(2) 作業・操作技能の特性

視覚以外の感覚で活動する生徒の場合、対象物の様子などを言葉にして情報を与える働きかけは、生徒が対象物を注意深く確認しようとする意識を引き出したり、確認している対象がどのようなものなのか安心してながら経験と結びつけながら理解することを助けたりするなどの効果がある。このため、視覚的な情報を中心とした活動となる教材等を扱うときは、可能な限り生徒が自ら触ることができるようにするため、一人一人に教材等の準備をしたり、生徒が自ら触り説明から情報を得て操作したりするなど活動するために配慮が必要な場合がある。また、必要以上に活動が消極的にならないように正確な情報保障を行うなど配慮が必要な場合がある。

- ・視覚的な情報保障にともなう配慮
- など

(3) 文字処理や点字表記上の特性

原典教科書のレイアウトから内容の関係性や優先順位など文章の流れがわかりやすくなるよう考慮するとともに、情報量の調整や配置の調整など適宜行う必要がある。また、原典教科書は、文字の大きさにより項目の重要度を表している場合、色や字体で重要項目や強調の意味で使用されている場合、図形や線等を原典教科書に書き込む場合等があるため、通常の文字（墨字）と同等に理解できるよう点字表記の工夫が必要な場合がある。

- ・表音文字である点字表記上の特性にともなう配慮
- など

3 編集の具体的内容

(1) 体裁・レイアウト

① 各章の始まる前の1ページ（ふりかえり）「…」の学習の前に

タイトルは7マス目から始め、2行にわたるときは9マス目から書き始める。その後空行を入れる。

見出し番号は5マス目から書き出し、裸数字のあとに2マスあけて項目を続ける。2行にわたるときは7マス目から書き始める。

(例1)は、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とし、5マス目から書き、内容は改行して書く。例の前後は空行を入れる。[1]は1. とし、3マス目から書き始め、2行にわたるときは1マス目から書く。

例の右にある問題は、1行あけて、問い番号を付けた上で書き始める。

② 各章の内容

章のタイトルは、9マス目から書き出し、2行にわたるときは11マス目から書き始める。

節について、1章の2節の場合は、1-2として、7マス目から書き出し、2行にわたるときは9マス目から書き始める。

節のあとの項目は、裸数字で1、2などとし、5マス目から書く。副題は、改行して一-を付け、7マス目から書き始める。

小見出しは、5マス目から書く。

Qは、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とし、3マス目から始め、2マスあけて内容を続ける。

旗のマークは、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とし、3マス目から始め、2マスあけて内容を続ける。

例1は、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とし、5マス目から始め、2マスあけて見出しを書く。見出しの書き出し位置よりも2マス前から書き始める。

問1は、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とし、3マス目から始め、小問番号は1. 2. などとする。

右側にある青い囲みは、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とし、5マス目から始め、行を改めてから内容を書く。囲みは書かない。また、図式的な表現は言語化することを原則とし、言語化により、本文と同等の内容になってしまう場合は、(メモ)全体を削除する。

なお、本文の中で出てくる大きな青い囲みは、枠に入れる。

「まとめ」は、まとめを5マス目から始め、行を改めて枠に入れる。タイトルは枠内で5マス目から書き始める。まとめの中の番号は、1. 2. とする。

Linkは、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とする。

「やってみよう」は、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とし、5マス目から始め、2行にわたるときは7マス目から始める。内容は枠の中に入れる。●で問題等が書かれている場合は、前後1行あけて内容を書く。特に、「問1」などはつけない。

「ふりかえり」は、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とし、5マス目から始め、2マスあけて項目名を入れる。また、該当のページ数がある場合には、項目名のあと、2マスあけてp〇〇と入れる。2行にわたるときは7マス目から始める。さらに、ふりかえりの内容が書かれている箇所については、改行して3マス目から内容を書く。

TRYは、 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶ とし、5マス目から始め、2マスあけて見出しを書く。見出しの書き出し位置よりも2マス前から書き始める。

Noteは、墨字のノート作成などに関する内容が多いため、点字に関連することがあれば残すが、原則削除する。残す場合は、5マス目から ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶ と書き、改行して3マス目から内容を書く。なお、原則削除しているため、第1巻に掲載する「この教科書について」の記述も削除する。

注意は、前の内容と空行を空けずに記す。 ⠠⠨⠶⠨⠶⠨⠶⠨⠶ のあと、2マスあけて内容を

書く。

欄外右にあるコメントは、 $\ddot{\ddot{\quad}} \ddot{\ddot{\quad}}$ 入れて挿入することを原則とする。基本的には5マス目から始め、2行にわたるときは揃える。ただし、内容によっては本文の一部としたり、(メモ)とする場合もある。

会話は、話し手の名前を「さん」を省略し、3マス目から書き、2マス空けたあと「」の中にセリフを入れる。2行にわたるときは1マス目から書く。生徒や先生、キャラクターのイラストはすべて省略する。

③ 確認問題のページ

タイトルは「2-1の確認問題」などとし、7マス目から書き始める。

大問番号は5マス目に裸数字で書き、2マスあけて見出しを書く。各問題に付随するページ数は(p〇〇)とする。

小問番号は1. 2. などとする。

④ 章の問題

問題Aなどは、5マス目から始める。

大問番号は裸数字で、3マス目から始める。

小問番号は1. 2. などとする。

⑤ チャレンジ編

「ぐんぐんのぼそう チャレンジ編」は9マス目から始める。

「第1章 正の数と負の数」は7マス目から始める。

「力をつけよう！」や「力をのぼそう！」は、 $\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\quad}}}} \ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\quad}}}}$ などとし、5マス目から書く。

大問番号は裸数字で5マス目から書き、その後、2マス空けて見出しを書く。該当ページは(p〇〇)とする。

改行して3マス目から設問を書く。

小問番号は、1. 2. などとする。

「up」は、小問番号のあとに1マス空けて、 $\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\quad}}}} \ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\quad}}}}$ と書き、2マス空けて問題を書く。upに該当する問題にはすべてこの印を入れる。

「力をのぼそう！」について、例題1などを5マス目から書き、2マス空けて見出しを書く。改行して本文を3マス目から書く。

「考え方」は、 $\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\quad}}}}}} \ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\quad}}}}}}$ とし、5マス目から書き、改行して3マス目から内容を書く。

「解答例」は、 $\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\quad}}}}}}}} \ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\ddot{\quad}}}}}}$ とし、5マス目から書き、改行して3マス目から内容を書く。枠は省略する。

「力をのぼそう！」の大問番号は裸数字で5マス目から書き、改行して3マス目から内容を書く。

⑥ 中学〇年のまとめ

「中学〇年のまとめ」を9マス目から書く。その後、1行あけて3マス目から「中学1年の内容を、…」とコメントを書く。

「算数」や「1年」などを7マス目から書く。

「偶数、奇数」などのタイトルを、「1 偶数、奇数」などとし、5マス目から書く。

箇条書きの・を、1. 2. などとし、1 などを(1)などとする。どちらも3マス目から書く。さらに、例も(例)として3マス目から書く。

原典教科書では、横方向で学年の流れが示され、縦方向では学年を縦断して分野ごとにこれまで学んできたことが示されているが、点字教科書では学年ごとにまとめて掲載した。

⑦ 〇年の復習

「〇年の復習」を7マス目から書く。

大問番号は裸数字で5マス目から書き、その後、2マス空けて見出しを書く。

改行して3マス目から設問を書く。

⑧ 図・表の番号

図や表の番号は、図は図の通し番号、表は表の通し番号とする。

各章ごとに番号を改める。章末の問題は1から始める。

図の位置の表現については、点訳の際に代わる可能性もあるので、特に位置を限定する必要がある場合は、明記する。図の位置の表現として、「次」、「次ページ」、「p〇〇」などを用いた。

図はできるだけ横書きを避けるようにした。

⑨ 探究ノート

ア. 本冊の参照ページ数については、ページ数は表記せず、該当の巻数や章のみを記した。

イ. 各学年の探究ノートの後半に掲載されている「ワークシート」は省略し、ワークシートの項目のみを「課題」の後に掲載した。また、これに伴い、「このノートの使い方」の「課題と対話のページ」を「課題のページ」と「活動の例（生徒たちの対話）のページ」に分け、それぞれの説明文を以下のように変更した。さらに、「ワークシート」に関する記述を削除した。

課題のページ

探究のページや課題学習のページで取り上げられた内容に関する課題をその課題を解決する活動の観点が書かれています。

活動の例（生徒たちの対話）のページ

課題を解決する活動の例が、生徒たちの対話として書かれています。

発言内容を参考にして活動を進めることも、活動後のふりかえりに利用することもできます。

ウ. レイアウトは以下のようにした。

1行目には、9マス目から ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ または ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

2行目の7マス目から 番号 ⠠⠠タイトル⠠⠠ とし、改行して9マス目から（本冊 〇

章・・・)と書く。

そのあと1行あけて、5マス目から 本冊で学んだこと と書き、改行して本文を始める。

また、本冊の引用部分については、5マス目から該当の巻数を書いたあと、枠に入れる。

「課題」は5マス目から ⠠⠠⠠⠠ と書いたあと、1行あけた上で、ワークシートのページで書かれている観点を、番号を付けて記す。コメントなどがついている場合は、必要に応じてカンガルのセリフとした。

ワークシートの観点をすべて書いたあと、1行あけた上で、5マス目から ⠠⠠⠠⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠⠠⠠⠠ ⠠⠠⠠⠠⠠⠠ と書き、改行して生徒と先生の対話を続けた。

(2)表記法

原則、「数学・情報処理点字表記解説 2019年版」に従った。なお、生徒の読みやすさなどに配慮し、以下の点に留意した。

① 今回からの変更点

- ・数符から始まる数式以外には数式指示符を付する。
- ・関係記号(=や<、>など)のあとは1マスあけとする。

② マスあけ

- ・線の名称などをあらわす ⠠⠠⠠ のあとは1マスあけとした。
- ・番号類のあとは、記号と内容を見分けやすくするために2マスあけた。
- ・図の番号(例えば ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠)は途中で行替えをしない。
- ・数のあとについて、単位以外の助詞などは1マスあけて記した。
- ・空欄記号のあとは1マスあけを原則とし、英字の単位は続けた。

③ 符号・記号

ア. 句読点の省略

数やアルファベットの後の読点は削除し、1マスあけを原則とした。数式の終わりに書かれている句読点は省略した。

イ. つなぎ符

日本語の点字表記では、アルファベットのあとに言葉が続く場合つなぎ符をはさむことになっているが、算数・数学の点字表記では、「 \sim 」などとの混同を避けるためにつなぎ符を用いなくてマスあけで示すことになっている。本編集においてもこの原則に従った。

ウ. 数字の表記

数を含む語については、点字表記法では仮名がきであらわすことになっている場合もあるが、数学の教科書においては、数字に単位がつく場合や、数としての認識が重視される場合は、数字を使用して表記することを原則とした。具体的には次のような場合である。

1のくらい、10のくらい。

1けた、2けた、3けた。

- オ. 計算の法則などの表現で、○△□などが使用されているところが、生徒が点字で記録できるように、(フ)・(ム)・(マ)などの文字に置き換えた。
- カ. 触覚による認知では、視覚活用の場合のように広範囲を同時にとらえることが困難なことに配慮し、2次元的に表現された図表等を掲載する場合は、前もって何を読み取るのかを文章により明確に説明した上で、図表等を提示することを原則とした。
- キ. 図中の文字については、それが示している該当箇所の近くに配置したが、紙面の制約が大きいため、凡例などを用いて、適宜省略をした。文字の配置に当たっては、該当箇所に近すぎることによる該当箇所の認識を妨げないように、適度な間隔を取るようにした。

② 図・表について

ア. 共通事項

- (a) 図表番号については、一つの单元の中で通し番号を付し、図は図-1、図-2など、表は表-1、表-2などとした。また、図表番号は4マスあけて書き始め、2マスあけてタイトルを記した。タイトルが2行にわたる場合には、2行目は6マスあけて書いた。
- (b) 図表の位置の示し方について
- ・本文中での「右の図」「下の図」という表記については、「次の図-1」、「次ページの図-1」、「〇〇ページの図-1」とした。
 - ・本文中に特に図の活用に関する指示がない場合は、本文中、あるいは、関連する文章の文末にカッコ書きで記した。いずれにするかは、どの段階で図を参照することが望ましいかを判断して行った。
- (c) 図や表が横書きとなる場合には、ページ行に図表番号と(よこがき)と書いた。また、横書きの状態でも改めて図表番号から記した。なお、見開きの場合も同様とし、見開きの向きは揃えた。
- (d) 図形の中で長さが等しいことを表すマークについて、図形本来の線をたどりやすくするために、線分を横断させず、片側のみで示した。
- (e) 図の認識を最優先に考え、平行を表す記号や矢印などは別の表現に置き換えるようにした。
- (f) 二つの図形が接している図については、二つの図形を認識できるように、共有点を作らず、二重線で表現した。
- (g) 方眼の数を数える必要がある図については、方眼の大きさに考慮し、1.5cmを原則とした。他の方眼についても、可能な限り、原則に沿えるよう、課題の変更なども行った。
- (h) 長さを表す数値の位置は、長さの把握を優先するものと、形の認識を優先するものによって考慮した。
- (i) 探しやすさと比較のしやすさに配慮し、課題に合わせて、各図形への番号の付加や、向きや並び方の調整を行った。
- (j) 表やグラフの数字については、数符を省略した場合もある。なお、その場合は、本文中にその旨を表記した。
- (k) 図の外形線や重要な線は、触刺激の強い中程度の凸点の連続線や点線を用い、補助的な線や展開図の折り線などには小点や凹点の連続線や点線を用いた。グラフは、原則と

して座標軸以外の方眼線は読み取りに支障をきたさない限り凹点とし、他は凸点とした。なお、方眼や座標の目盛り線など、そのままでは密度が高く触読の困難なものは、適宜省略したが、方眼の1メモリが触読に適した大きさよりも小さな方眼でしか表現できなかったものもある。

- (l) 寸法線や寸法補助線は、すべて描くと触図の読み取りを困難にするため、誤解のない限り省略して必要な部分のみとした。なお、矢印については、寸法線など範囲を示すだけのものは省略した。
- (m) 図中の単位については、図中に書ききれない場合には、(注)として図の最初にまとめて記す方法なども用いた。
- (n) 図や表中の数学記号やアルファベットについては、数式指示符や文字を、誤読の恐れがない限り省略した。

イ. 図形以外の図

- (a) 地図などの縮図については、触覚的に弁別しやすい程度に拡大するなど触ることを踏まえた表現を心がけた。
- (b) 読み取る必要がある要素を探しやすくするために、大きさ・位置・向きなどの調整を行った。

ウ. 平面図形

- (a) 図形の中の等しいマークなどは、例題や例については必要な部分を入れたが、問の図については文章から読み取れることを目指し、原則省略した。また、長さが等しいことを示すマークについては、図形の外形をはっきりと認識できるように、次のように辺の外側だけに記した。
- (b) 基本図形が題材の課題においては、参照の負担を軽減するために、図を言葉に置き換えたところもある。

エ. 空間図形

- (a) 触知覚による空間図形の平面での表現の認識はとても難しい。基本的に、模型などが必要であるが、平面で表さざるをえないこともあるため、幾つかの方法で表している。

- ・ 投影図法の表現
- ・ 展開図
- ・ 断面図
- ・ 文章化

投影図法では、「平面図」、「立面図」などの表現はとらず、「上から見た図」の下に「正面から見た図」をおくことを原則とした。これは、触って立体をとらえていく状況と類似している第3角象限法を採用している。

課題の内容に応じて、一方向からの図や断面図を用いる場合もある。

見取り図のことを問う課題については、当該の表現に関する課題に変更した。

- (b) 空間図形の高さや、線分の途中に様々な情報が含まれている線分の長さを表す場合には、該当箇所から少し離して点線を表し、その外に数値を入れた。

- (c) 立方体の頂点の名前の付け方については、触認知のしやすさに考慮して、上から見た図の場合、左上から反時計回りにA～Dを割り当てている。

オ. グラフ

- (a) グラフの方眼は裏点を原則とした。
(b) グラフのリード線などは、裏点または弱い点とした。
(c) グラフの読み取りやすさを優先して、軸の数値は必要最小限とした。また、課題に合わせて、方眼も削除し、必要な線のみ残した。
(d) ヒストグラムは、棒の境は1本線であるが、触認知の特性に配慮し、一つ一つの棒がはっきりすることを優先して、二重線とした。

カ. 表

- (a) 表は、表番号を示した後、表の内容を枠で囲んだ。
(b) 出来る限り、表全体が1行に収まるよう、表の項目名が長い場合や単位がついている場合は、注記を入れ、表中の項目の欄を短縮した。また、それでもマス数に収まらない場合には、枠を含めて次に移し、5マス目から書いた。
(c) 列項目が多い表については、紙面などを考慮し、縦と横の入れ替えを行ったものもある。ただし、関数の表については、原則、縦と横の入れ替えを行わなかった。なお、表の途中までしか入らなかった場合には、行を改め、最初の書き始めより4マス下げて続きを書いた。

* グラフでは、x軸が水平方向に、y軸が垂直方向に描かれるという基本的なことをしっかり押さえておく必要がある。

- (d) 数の大小の比較が必要なものについては、桁ぞろえとした。
(e) 列間の間隔が空きすぎないように、適宜各列の書き始めを変更した。
(f) 表のデータは囲む枠で囲むこととした。また、枠内の書き始めは、原則3マス目からとした。これは、表の場所を探す際、表題を探すこともあるが、何度も参照する場合は、素早くデータ部分に手が到達できるようにする配慮である。行頭を縦方向に探索する場合、複数行にわたり2マス下がっていることで、手が止まりやすくなることを利用している。
(g) 何列の表であるかが早い段階で分かるようにするために、列の間の表の枠の線に1点を加えた。これにより、列の境も確認できる。表によっては、行と列を区別するための線を入れることも考えられるが、紙面の制約もあるため、この方式を選択した

③ 課題の変更

- (a) 説明文や問題文などは、原典教科書どおりに表記することを原則としたが、生徒にとって理解が困難であるとおもわれる内容や表記、活動については、原典教科書の趣旨を生かして、説明や問題の一部を差し替えたり、削除したりした。原典教科書にある「書き入れなさい」は、別紙に書くことも考慮して「書きなさい」や「示しなさい」、「図に書き入れなさい」は「図で考えなさい」や「図に記しなさい」、「点をとりなさい」は「記しなさい」、「表の空らんをうめなさい。」は「表を完成させなさい。」

「図形をかきなさい」は「図形を考えなさい」、「作図しなさい」は「作図の方法を説明しなさい」などと表現を変更した。

- (b) 教科書に直接に書き込んだり絵を描いたりする課題については、点字教科書ではそうした活動が困難なため、点字器や表面作図器（レーズライターセット）を用いて作業できる課題に変更した。
- (c) 上記(a)と(b)の配慮でも難しいものについては、作業の流れが分かるような説明に置き換えることとした。
- (d) □にあてはまる数や式を入れる場合に、原典教科書では□に記号がついていないことが多く、解答を書きやすくするため、□に記号をつけた。なお、式中の符号などを□にしている場合は、記号をつけると読みにくいこともあり、記号はつけず、完成した式すべてを解答するように指示を変更した。

④ 累乗・根号や垂直などの数学の表現や記号について

初出の際には、(注)として挿入し、点字での表記とともに普通の文字の形を点図で表すことにした。

⑤ 教材について

- (a) 電卓については、音声あるいは触読ピンで出力する機種を利用することができる。ただし、現状では、小型で廉価な機種はルートキーがないなど、音声電卓の環境は必ずしも十分ではない。そのため、応用可能な部分については、盲人用そろばん（『盲学校小学部点字教科書編集資料』「算数」参照）や、コンピュータを音声などの出力によって利用したりするなどの工夫も必要である。平方根表は、原典教科書にはないが、このような事情を考慮し、3学年第2巻末に入れることとした。

⑥ その他

- (a) 強調文字は、「」ではさんだ。ただし、本文中の赤や青の点線などが記された本文の部分については、本文の読みやすさを重視して、注意を喚起する特別な記号を用いないこととした。
- (b) 式についている①などの表現は、点字の小カッコを使用して、(# 1) などとして表現した。
- (c) 筆算形式の式には、式の前に（筆算）とかいた。
多項式の計算や連立方程式の計算により、筆算の形式が取られているが、原則そのままとしている。ある特定の文字に注目するなどの目的があるためである。
- (d) 原典教科書の「小学校」「中学校」という文言を、それぞれ「小学部」「中学部」に変更した。